

第2回旭川駅周辺かわまちづくり推進WG 議事要旨

日 時：令和6年9月3日(火) 18:00~20:00

場 所：旭川市役所 総合庁舎7階 大会議室B

出席者：佐藤座長、鈴木委員、大黒委員、荒屋委員、荻野委員、寺島委員、億貞委員、馬場委員、小原委員、川辺委員 計10名

議 題：前回WGの振り返り、各事業の報告、令和6年度における重点的な活動方針の状況、施設設計、今後のスケジュールについて



1. 議題に対する意見

(1) 施設設計

- ・ 温暖化を想定した設計や忠別川上流のダムを考慮した検討を行うのがよいと思う。
- ・ 施設を整備してもダムとうまく調整できるのか。
- ・ 忠別川の滞筋が変わった時にどうするか、また変わらないようにするためにはどうするかを検討していただきたい。
- ・ ダムが機能している範囲の中小規模の洪水でできるだけ持つようなデザインにすればよい。
- ・ 水制工を張り出すことでワンドが形成され柔らかな流れができるので、ボートが出し入れしやすくなると思う。
- ・ 神楽岡公園は、忠別川が大きく蛇行してきたカーブ地点にあたり、駐車場の前後で見ると一番川底が掘れて深い部分になっているので、穏やかなワンドみたいな水域がはたして現実に作れるのか。
- ・ 礫河原の創出はとても時間がかかり維持管理が非常に課題となるので、水制工によるワンドの形成といった自然の力を活かした方が維持管理も楽だと思う。
- ・ ある程度今あるヤナギ等を伐採して少しでも昔のようなイメージになればよいと思う。
- ・ 川と触れ合う場所として神楽岡公園は貴重な場所で、整備されれば隣の小学校は活用すると思う。
- ・ 整備箇所に産卵床がなくても、水の吸排が起こって産卵床に大きく影響するという過去の事例があるので、環境調査、事前調査、整備上の要因・課題をきちんと整理する必要がある。
- ・ 川は、どこかをいじれば上下流に影響が出るという側面を持っているので、川全体をある程度のスパンで考えないと、我々が思うような環境の確保、あるいは利用の確保が逆にできないと

いうことも考えられる。

- ・局所的に整備するのではなく、川全体の上流から下流への流れも見ながら検討してほしい。
- ・孵化してきた稚魚が育ち川を下っていけるような環境も必要である。
- ・自然環境の保全に人が関わってくるとなった時に、どこまでお互い共存していけるのかがポイントで、理想と現実でどう向き合っていくのか。お互いに妥協しなくてはならないところも当然出てくる。
- ・生態系も豊富な忠別川で、これから川を観光資源としてやっていく中で共存してルールを決めてやっていくか、全国でも珍しい事例になると思う。
- ・観光客、地域住民のためということであれば、常日頃からオープンに利用できないといけないので、維持管理の仕組みを作る方がよほど重要で、総合的に検討する必要がある。
- ・ツインハープ橋上流のサイクリングコースをカヌーの発着場にするのであれば、サイクリングコースの一部をもう少し前が見やすいようなコースにルート変更が必要である。
- ・車の音も聞こえない、街の家も見えない、森の中を進んでいくというちょっと不思議な空間なので、いろいろなゾーンがあってもいいと思う。
- ・観光振興が要素としてあるのであれば、釣りを愛する人たちの意見も聞いた方が良いと思う。
- ・牛朱別川の側帯そのものは休憩場所としていいと思うが、トイレや水飲み場があれば、側帯の利便性が図られると思う。
- ・ただ木が生い茂っているところだったら、あえて管理の必要があるものを置かなくてもいいと思う。
- ・階段工はあっていいが、ベンチよりも木陰があった方がいい。
- ・長期的な展望を持って、この先旭川市全体がこの川をどう利用しながら、川の抱えている自然の魅力を活かしていくのかという枠組みを持たないとダメではないのか。

(2) 今後のスケジュール

- ・旭川駅周辺かわまちづくりのマークを入れていく、例えば日本遺産とかデザインウィーク等と協力していくことで、この事業自体を知ってもらうことを準備していったらいいのではないのか。
- ・ここに行くイベントが全部見られるというような情報発信をもう少しうまくやっていけたらと思う。

2. 情報連絡・意見交換

- ・こうした事業は SNS のアカウントを闇雲に連発して作っている印象があり、フォロワーを増やしていくのが難しいと思うので、協議会等で情報発信していけばいいと思う。
- ・神楽岡公園のワンドが難しいようであれば、駅裏でも他の場所でも SUP 等の一般利用ができるような環境があればいい。
- ・もっと利用を増やすということ言えば、例えば釣りイベント等を開くというのもあるかと思う。
- ・何のためにやっているのか、旭川をよくする、旭川を発信していくためにこの取り組みをやっているという根本的なことを常に忘れないで、物事を進めていかななくてはならない。